

平成15年度病虫害発生予報 第1号（4月予報）

平成15年3月27日
青 森 県

【概要】

水稲：苗立枯病の発生は概ね平年並と予想される。

りんご：津軽地域で腐らん病の発生がやや多いと予想される。その他の病虫害は平年並と予想される。

野菜：にんにくの春腐病の発生は平年並と予想される。

1 予報の内容

（1）水 稲

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (ヒシウム・フザリウム)	県内全域	-	平年並	4月の気温は平年並の見込みである。 フザリウム属菌やピシウム属菌に対する効果の高い剤による防除の徹底が見込まれる。
苗立枯病 (ごま葉枯病)	県内全域	-	少ない	前年の収穫期におけるごま葉枯病の発生量が少なかった。 4月の気温は平年並の見込みである。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	-	平年並	前年の発生が平年並であった。 前年の出穂期が低温であったため、感染が少ないと考えられる。
ばか苗病	県内全域	-	平年並	前年の本田における発生量が平年並であった。 効果が高い剤による種子消毒の徹底が見込まれる。

その他の病虫害

苗いもち：種子消毒は、ほぼ100%実施されると見込まれるが、前年の穂いもち発生量が多かったため、種もみ、もみ殻、罹病わらなどの保菌率が平年より高いと思われる、苗いもちの発生が目立つ場合も予想される。

(2) りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (葉腐れ)	県内全域	平年並	平年並	前年の実腐れの発生は少なかった。 消雪日は津軽では平年並、南部ではやや遅い～遅い見込みである。 4月の気温、降水量とも平年並の見込みである。
腐らん病 (枝腐らん)	津軽地域	-	やや多い	3月の発生量がやや多かった。
	南部地域		平年並	3月の発生量が平年並であった。
リンゴコカク モンハマキ	県内全域	平年並 (芽への食入)	平年並	越冬幼虫量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。
リンゴモンハマキ	南部地域	平年並 (芽への食入)	平年並	越冬幼虫量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。
キンモンホソガ	津軽地域	平年並	平年並	津軽では前年秋の発生量が多かったが、積雪量がやや多かったため、越冬率は低いと見込まれる。 南部では前年秋の発生量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。
リンゴハダニ	県内全域	平年並 (越冬卵のふ化)	平年並	越冬卵量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。

(3) 野菜

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(にんにく) 春腐病	県内全域	-	平年並	向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並の見込みである。

注) 予報の根拠内の気象情報は3月22日発表の1か月予報による。

1 防除のポイント

(1) 水 稲

《 3 ～ 4 月の防除作業 》

3 月		4 月				
5 半 旬	6 半 旬	1 半 旬	2 半 旬	3 半 旬	4 半 旬	5 半 旬
塩水選 / 浸 種		種 / 催 芽・播 種 / 出芽・緑化 / 硬 化				

種子消毒

フザリウム・ビシウム属菌による苗立枯病防除

リゾプス属菌
細菌性苗立枯病菌による苗立枯病防除

イネドロオイムシ 防除（床土混和・播種時処理）
イネミスゾウムシ

いもち病（播種時処理）

いもち病（緑化期処理）

イネドロオイムシ

イネミスゾウムシ

注： 印は必ず防除する。
印は前年の発生状況及び品種に応じて防除する。

【 種もみの準備 】

自家産のもみを種もみとして使用する場合は、いもち病、ばか苗病やごま葉枯病、もみ枯細菌病等が発生しなかったほ場産のもみを使用する。

【 塩 水 選 】

塩水選は充実したもみを選別するばかりではなく、いもち病、ばか苗病やごま葉枯病等に感染したもみを除去するためにも重要な作業であることから必ず実施する。

塩水の濃度は基準を守り、丁寧に実施するとともに、塩水選後は十分水洗いする。

【 種 子 消 毒 】

塩水選後浸種前に、次の表のいずれかで種子消毒を行う。

薬液の量は、種もみと同じかそれ以上の容量とし、種もみが薬液から出ないようにする。

薬液に浸漬して消毒する場合は、薬液の温度が10 以下のような低温になると防除効果が低下する傾向があるので、液温があまり低くならないように屋内で行う。

低濃度長時間浸漬で消毒する場合は、浸漬中に2～3回薬液をよく攪拌する。

高濃度短時間浸漬で消毒する場合は、網袋に入れたもみに薬液がよく付着するように網袋をよくゆする。

生割れ以上の種もみを消毒すると、生育遅延等の薬害を生ずるので行わない。

【 浸 種 】

浸種時の水の量は、種もみの2倍かそれ以上の容量とする。

浸種中の水温が低いと消毒の効果が低下する傾向があるので、水温は10 以下にならないようにする。

消毒後の浸種は流水を避け、水の交換は初めの2日間を行わない。その後は3日に1回程度、静かに換水する。

消毒後の種もみは、魚介類に強い影響を及ぼす薬剤もあるので、河川・湖沼・ため池等で浸種しない。

種子消毒剤の防除対象病害一覧表

農 薬 名	処 理 方 法	風 乾	対 象 病 害 虫				
			ばか 苗病	いもち 病	ごま 葉枯病	もみ 枯細菌病	苗立 枯細菌病
ヘルシード水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
ヘルシード乳剤	20倍、10分間 200倍、24時間						
ケ ス 水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣						
テクリード水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
トリフミン水和剤	30倍、10分間 0.5%、粉衣						
トリフミン乳剤	30倍、10分間 300倍、24時間 5～10倍、3%塗沫						
スボルタック乳剤	100倍、10分間 1000倍、24時間						
テクリードC フロアブル	20倍、10分間 200倍、24時間						
ヘルシード T水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
ヘルシード Tフロアブル	20倍、10分間 200倍、24時間						
トリフミン スターナSE	20倍、10分間 200倍、24時間 7.5倍、3%塗沫						
モミガードC 水和剤	0.5%、粉衣 200倍、24時間 7.5倍、3%塗沫						
スターナ水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
モミゲンキ水和剤	200倍、24時間	×					

注1) 風乾欄に 印のある農薬を使用する場合は必ず風乾する。×印のモミゲンキ水和剤は、処理後もみが乾かないようにする。

注2) モミゲンキ水和剤は生物農薬なので、保管は冷蔵とし、開封後は使い切りとする。

注3) モミゲンキ水和剤は、ばか苗病、いもち病等の防除剤との併用で使用する。ヘルシード水和剤とテクリード水和剤とは混用または浸種後に処理できる。乳剤や、風乾の必要な剤とは混用できないので、その場合は浸種前にそれらの剤で処理し、浸種後の催芽前日か、催芽時にモミゲンキ水和剤で浸漬する。

注4) スターナ水和剤は、ばか苗病、いもち病等の防除剤との混用で使用する。

【 フザリウム・ビシウム属菌による苗立枯病の防除 】

土壌のpHを5.0前後に矯正する。

播種前に次のいずれかの方法で薬剤処理を徹底する。

タチガレエース粉剤を育苗箱1箱当たり8gの割合で床土に均一に混和する。

タチガレエース液剤の500～1000倍液を、育苗箱に床土を詰めかん水してから、箱当たり500mlの割合でかん注する。

育苗中の温度管理を徹底する。また、過湿にならないように注意し、健苗育成に努める。

【 リゾプス属菌による苗立枯病の防除 】

育苗箱等の育苗資材は、十分水洗いしたものを使用する。

傷もみの混入が多いと多発しやすいので、傷もみが多い場合は、種として使用しない。

厚播きすると発生が多くなるので、基準播種量を守る。

播種前につぎのいずれかの方法で薬剤処理する。

播種5日前～播種時に、ダコニール粉剤を箱当たり15～20gの割合で床土に均一に混和する。

育苗箱に土を詰め、かん水してからダコニール1000の500倍液を箱当たり500mlの割合でかん注する。

なお、いずれの場合もタチガレエース剤と併用または混用ができるが、ダコニール粉剤とタチガレエース粉剤との併用では初期生育を抑制することがあるので、基準薬量を厳守する。

また、ダコニール粉剤は、砂質土壌では初期生育の抑制等の薬害を生じることがあるので使用しない。

高温、過湿で多発するので注意する。特に、播種～出芽期の温度は30～32℃以上、緑化～1.5葉期の温度は30℃以上にならないよう注意する。

【 ごま葉枯病菌による苗立枯病の防除 】

育苗時の高温・過湿は発病を助長するので、適正な育苗管理に努める。

【 もみ枯細菌病・苗立枯細菌病菌による苗立枯病の防除 】

前述の[種子消毒]あるいは、次のいずれかで行う。

播種時に次のいずれかの方法で薬剤処理する。

播種前に、カスミン粒剤を育苗箱1箱当たり30gの割合で床土に均一に混和する。

播種後覆土前にカスミン粒剤を育苗箱1箱当たり15～20gを、播種した種もみの上から均一に散粒する。

カスミン液剤の4～8倍液を育苗箱1箱当たり50mlを播種した種もみの上から均一に散布する。

育苗中の温度管理を徹底する。特に高温、過湿にならないように注意し、健苗育成に努める。

【 播種時または緑化期におけるいもち病（葉いもち）の防除 】

前年発生の多かったほ場や抵抗性「中」以下の品種を使用する場合、次のいずれかの薬剤処理により、本田での予防防除を省略できる。

播種時（覆土前）に、デラウス粒剤、デラウスプリンス粒剤10、デラウスプリンス粒剤06またはウィン箱粒剤を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

緑化期に、デラウス粒剤、ウィン箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤またはDr.オリゼプリンス粒剤6を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

【 播種前～緑化期におけるイネドロオイムシ、イネミズゾウムシの防除 】

例年発生が多いほ場や、本田や移植時での防除が労力的に難しい場合には、次のいずれかの方法で薬剤処理する。

床土用の土にパダン粒剤4を育苗箱1箱当たり80g、またはプリンス粒剤を育苗箱1箱当たり50gの割合で混和する。

播種時（覆土前）に、プリンス粒剤を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

緑化期に、Dr.オリゼプリンス粒剤 6 を育苗箱 1 箱当たり 50 g を均一に散布する。

ただしパダン粒剤 4 は、薬害（苗の白化・葉先枯れ・巻葉）を生ずるので覆土には混和しない。また、床土の種類によっても薬害を生じることがあるので、火山灰性の畑土や山土（りん酸吸収係数 2000 以上）、砂土など有機物の少ない土壌では使用しない。

プリンス粒剤は低温で生育抑制を生じる恐れがあるので温度管理に注意する。

【 苗代におけるケラの防除 】

〔播種前〕 耕起、整地して置床を作ってから、ダイアジノン粒剤 5 を 10㎡当たり 40 g の割合で置床とその周辺に均一に散布する。

【 苗代におけるキリウジガガンボの防除 】

〔播種前〕 耕起、整地して置床を作ってから、バイジット乳剤 1000 倍液を、苗床 1 ㎡当たり 300～500ml 散布する。

（ 2 ） りんご

【 モニリア病 】

消雪を促進し、園地内の排水に努め、地表の乾燥を図る。

「芽出し当時」は防除上最も重要な時期なので、薬剤散布は遅れないように必ず行う。

葉腐れは見つけ次第摘み取って処分する。

【 腐らん病 】

薬剤だけに頼ることなく、常時園内を見回り早期発見、早期治療を行う。

発芽前の粗皮削りは必ず行う。

剪定後の切口にはできるだけその日のうちにバッチレート塗る。

「芽出し当時」の薬剤散布は遅れないように必ず行い、枝幹部に十分付着するように散布する。

胴腐らんは発見次第泥巻きを行うか、削り取って塗布剤を塗る。トップジン M オイルペーストは薬剤耐性の懸念があるため、再発した場合は、泥巻きを行うか、他の塗布剤を塗る。

【 ハマキムシ類 】

「芽出し 10 日後」にハマキムシ類防除剤を加用する。

リンゴモンハマキにはスミチオン水和剤、ダズバン水和剤、トクチオン水和剤、エルサン水和剤、ミクロデナポン水和剤、スプラサイド水和剤のいずれかの防除薬剤を使用する。リンゴコカクモンハマキにはダズバン水和剤、トクチオン水和剤のいずれかの防除薬剤を使用する。

この時期のピレスロイド剤散布は訪花昆虫への影響が懸念されるので絶対に使用しない。

【 キンモンホソガ 】

発生が多い場合は、「芽出し 10 日後」に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー顆粒水和剤、モスピラン水溶剤のいずれかの防除剤を加用する。

【 リンゴハダニ 】

越冬卵を殺卵するため、「芽出し当時」のマシン油乳剤 (97) の散布は遅れないように必ず行う。

（ 3 ） 野菜

にんにく

【 春腐病 】

消雪後の腐敗株は伝染源となることがあるので、抜き取りを徹底する。

抜き取り後、新たに発生が認められた場合、7 日おきくらいに薬剤散布を数回実施する。

窒素過多等で生育が旺盛なほ場では多発する傾向があるので、降雨が続くような場合には予防散布を実施する。

排水性の良くないほ場では、滞水しないよう、排水に努める。

【農薬取締法の改正について】

昨年、無登録農薬が全国的に流通し、使用されている実態が明らかとなり、国民の「食」に対する信頼を損なう大きな問題となりました。

このため、昨年12月に農薬取締法が改正され、3月10日からこの改正法が施行されました。主な改正点は、無登録農薬の製造、輸入、使用の禁止（販売は従来から禁止）、農薬使用基準に違反する農薬使用の禁止、罰則の強化などであり、農薬を製造・輸入・販売及び使用するすべての国民に関係する内容です。

農家だけでなく、家庭菜園や花壇や芝の手入れをする人であっても、農林水産省の登録番号のある安全性の確認された農薬を、ラベルをよく読んで使うことが必要です。無登録農薬はみんなで排除しましょう。詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページ（<http://www.maff.go.jp/nouyaku/>）の「農薬コナ」をご覧ください。

4月の病虫害テレフォン情報案内

〔津 軽 地 域〕 電 話 0 1 7 2 (5 3) 0 0 3 3

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
3	下	水稻の種子消毒		
4	上	4月病虫害発生予報について		
	中	苗立枯病と育苗管理	モニリア病とリンゴハダニの防除	
	下	苗立枯病と育苗管理	モニリア病とハマキムシ防除	

〔南 部 地 域〕 電 話 0 1 7 6 (5 3) 9 1 6 1

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
3	下	種籾消毒と育苗期の防除	リンゴ腐らん病の防除	
4	上	4月病虫害発生予報について		
	中		りんご芽出し当時の防除	にんにく春腐病防除
	下	苗立枯病の防除対策	りんご芽出し10日後の防除	ながいも根腐病の防除対策

なお、テレフォン情報は、病虫害の発生状況により変更することがあります。

予察情報及びテレフォン情報は、アップルネット（県農林水産部による農業情報サービスネットワーク）にも掲載されています。

〔URL〕<http://apple.net.pref.aomori.jp/>

病虫害に関する問合せ先

	電 話	F a x
青森県農業試験場病虫害防除室	0172(52)9500	0172(53)3717
青森県畑作園芸試験場病虫害防除室	0176(53)7631	0176(51)8258
青森県りんご試験場病虫肥料部	0172(53)6132	0172(52)5934
青森県りんご試験場県南果樹研究センター	0178(62)4111	0178(62)4114
フラワーセンター21あおもり生産技術部	017(728)8721	017(728)8727